

報告

第 26 回・第 27 回

日本天文学会ジュニアセッションの報告

松本直記（慶應義塾高校）・檜木梨花子（星空公団）・
日本天文学会ジュニアセッション実行委員会

1. はじめに

天文学会春季年会時に開催されるジュニアセッションには、今年も多く参加があった。本投稿では、まず第 27 回を報告し、後半に昨年の第 26 回を合わせて報告する。

2. 第 27 回（2025 年）の報告

水戸市民会館で行われた日本天文学会 2025 年春季年会の最終日に、第 27 回ジュニアセッションが開催された。会場は市民会館で最も大きい、最大で 2,000 人を収容する大ホールを割り当てていただいた（図 1、図 2）。まさに茨城県を代表するホールと言っても過言ではない立派な会場での開催となった。



図 1 会場の様子（発表者側）



図 2 会場の様子（座席側）

3. 参加状況

今回も、コロナ禍以降すっかり定着した現地と Zoom によるオンラインのハイブリッド形式で実施した。全国から多数の発表希望があり、発表数 63 件、そのうち現地会場での発表が 41 件であった。

参加者数は、現地会場では発表生徒 168 名、指導者 38 名、そして、保護者や一般の参加者、運営関係者を合わせると 305 名、加えて年会参加の研究者が数十名参加した。

オンラインでの参加者は、発表関係者が 33 接続、その他が 39 接続であった。オンライン発表の場合、1 接続で複数人が参加している場合があるが、少なくとも 72 人以上のオンライン参加者があったことになる。結果、現地参加とオンライン参加を加えると、400 人を超える盛況となった。

発表については口頭発表の希望が多く、時間も限られているので、全ての発表に対しポスターを準備してもらい、その上で 3 分口頭発表（オンラインの場合、事前の動画提出を含む）、1 分口頭発表、ポスターのみの発表という形式に設定した。基本的には時間に余裕のあるポスターセッションにおいて具体的な資料の前で交流や議論を深めて欲しいという実行委員会の思いである。

また、例年通りタイの高校生たちの参加もあった。残念ながらコロナ禍以降はオンラインのみの参加であるが、高いレベルで流暢な英語による発表は日本の高校生に大いに刺激を与えたであろうと推察する。

4. 時程

- ・ 9:30 開会式・諸連絡
- ・ 9:45～11:23 口頭発表

座長：濤崎 智佳（上越教育大学）、

西 健一郎（鹿児島県立国分高等学校）

「星空環境」2 件、「位置天文」2 件、「太陽・月・惑星」5 件、「彗星・流星・小惑星」4 件、「装置・観測方法・宇宙開発」6 件、「その他（プラネタリウム、天文普及など）」3 件、1 分発表 10 件。

質疑応答は、カテゴリごとに 5 分程度の時間を設定し、まとめて受け付けた。

- ・ 11:23～13:30 ポスターセッション・昼食
高校生同士や指導教員、研究者による非常に活発な交流が行われた（図 3）。

なお、水戸市民会館 2 階にポスター会場を設定頂いたため、空間的にとても余裕のある会場であった（図 4、図 5）。

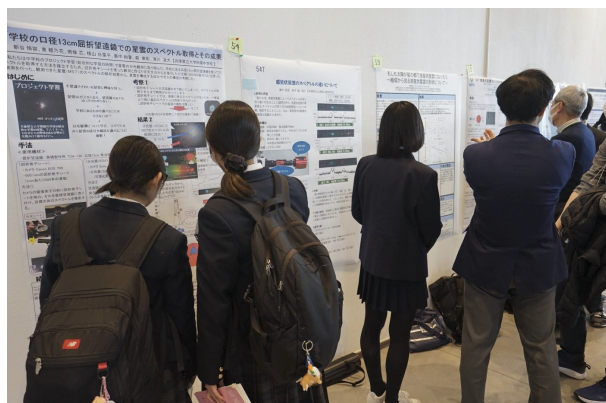


図 3 ポスターセッションの様子（交流時）



図 4 ポスターセッションの様子（会場）



図 5 実験・観測装置や工作物を展示する発表もあった。

- ・ 13:30～15:10 口頭発表

座長：鳥羽 儀樹（国立天文台）、

布施 亮平（駿台学園高等学校）

「タイセッション」6 件、「恒星」9 件、「星雲 3 件、「銀河・宇宙論」7 件。

- ・ 15:25～16:30 ポスターセッション

なお、各参加チームの発表予稿は以下のリンクより閲覧できる。



<https://www.asj.or.jp/jsession/2025haru/program.html>

5. 第 27 回のまとめ

オンラインを含むハイブリッド開催により、運営のためのタスクは増加している。しかし、実行委員長の山村一誠氏（JAXA 宇宙科学研究所）をはじめとした実行委員、世話人の皆さんの尽力で、ジュニアセッションが綿密に準備され、当日も複雑な運営を円滑に

行うことができた。

参加者が事前に提出する予稿集やポスター原稿は、実行委員、世話人によって丁寧に修正点が挙げられ伝達される。場合によっては何度もやりとりしながら掲載に資する状態にまで修正を重ねる。発表者にとって「学会で発表する」ことの責務と意義を感じ入るところだろう。

夕方のポスターセッションでは、発表が終わった緊張感からの解放もあってか、高校生どうして活発に議論する様子が見られた。

セッションは 16:30 で終了だが、名残惜しそうに「ジュニアセッション、終わって欲しくない」という声も聞かれた。発表者の心に小さな火を灯せたのなら実行委員、世話人としてこんな嬉しいことはない。

こうして、第 27 回ジュニアセッションは盛況の内に幕を閉じた。

6. 第 26 回（2024 年）の報告

昨年報告のタイミングを逸したため、第 26 回（2024 年）の開催概要についてもここであわせて簡単に報告する。

2024 年は、コロナ禍による完全オンライン開催を経た、2023 年からの現地・オンラインのハイブリッド開催が定着した年であった。なお 2020 年以前、コロナ禍におけるオンラインのみの開催、2023 年からのハイブリッド開催への移行といった総括的な内容は、7 月号の投稿『コロナ禍のジュニアセッションへの影響～コロナ禍はジュニアセッションに何をもたらしたのか～（篠原秀雄氏）』をあわせてご参照いただきたい。

第 26 回は、2024 年 3 月 12 日（火）に東京大学本郷キャンパスで行われた。現地参加人数は約 290 人であったが、全員が入る会場ではなかったため、2 つの大教室を Zoom で繋ぎ、発表を別室に中継する半ばオンライン的な方法での実施であった。別の部屋からの

質疑応答は、若干のタイムラグはありつつも、特に大きな問題なく質問や議論が行われた。

例年通り研究者の参加もあり、有意義な質問やアドバイスがされた。

タイからの発表も 5 件あった。全てオンラインであったが、英語での発表に対して、日本の生徒からの質疑応答もあった。

ポスターセッションは現地開催であるため、第 27 回同様、工作物や観測装置等の展示もあった。ポスターの前は、3 分という短い口頭発表を補う、理解や議論が進む重要な場となっていた。人が密集する場合は、解説員以外がいない様にする等、世話人が声掛けをしながら、感染対策もしつつ進行した。

またその他、研究者による手作りアンテナでの電波天文実演もあった（講師：谷敷怜空氏（豊田高専）、西村淳氏（国立天文台 野辺山宇宙電波観測所））。当日は曇天～降雨であったが、参加者は屋根の下で濡れないようにしつつ、水素 21cm 輝線の簡易観測を興味深く観察・学習していた。講演会「第 1 回中高生・教員と若手研究者の『天文対話』（野田博文氏（大阪大学））」も開催された。

このように発表・交流・体験・企画といった様々な機会から、学生は大いに刺激を受けたと考える。また開催地が大学であり、キャンパスの雰囲気を感じる事ができた事も、よい経験になったのではと、あわせて推察する。

開催後の参加者アンケートでは、「他の発表を見て世界が広がった、対面での参加者同士や研究者との密な議論から多くを学んだ」という声があり、現地参加のメリットを存分に享受したようである。

7. まとめ

オンライン併用のハイブリッド開催となったことで、遠方や学校行事等で都合が付き辛い場合でも、参加がしやすくなった。その一方で都合が付き、現地参加する事ができる

場合は、顔を合わせての交流はもちろん、中学生・高校生対象の企画等にも参加できる場合があるため、生徒・指導者の皆さんがそれぞれのメリットを最大限、享受していただければと考える次第である。

8. おわりに

本ジュニアセッションは、日本天文学会が主催し、日本天文教育普及研究会が共催、日本学術会議が後援した。

参加者および開催地関係者（第 27 回は野澤恵氏をはじめとする茨城大学の皆様、第 26 回は吉田直紀氏をはじめとする東京大学の皆様）ほか、ご協力いただいた関係各位に御礼を申し上げます。

なお、実行委員、世話人に次々と若い方が加入され活躍されている。しかしながらまだまだ人手不足の感は否めない。ご興味、ご関心のある方は是非ともお手伝い願いたい。

松本 直記

檜木 梨花子